IOMI

Ed: Kou MUKAI

2-12-2. ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN

17 Dec,'80 No.TO 244

イオム通信

大阪市阿倍野区旭町2-12-2

向井 孝

▼このごろイオム発行のピッチがだいぶおちてる。65年3月に1号を出した。これほど続くつもりはなかったが、大体20日に一回位、出す気が起って、三月以上休むということなど(この頃まで)ぼくの記憶では三度しかなかった。それが…である。

▼イオムを出そうか、と思うとき「あ、これ書いとこう」という意力みたいなものが、たいていある。ところが、このごろ、さてイオムでも、と思うとき、まるで自分のなかにぐたぐたあったものが、黒板ふきで消したように、消えてしまって見当らないのである。で「エート、さて、一体、何をかくかしと思案しながら、いつのまにか、イオムのつくり方が、ダ性的なものになっていることに気付いて、びっくりする。(そうなったらアッサリやめよ、とぼくはほじめからきめてきた)

▼といって、よく考えると、かきたいこと、そのおもしが全くないわけではない。そのときどきに、ふっとうかんで、それが忙しく他の用件に迫られているとき、程うかぶ。そして、ちょっとヒマができて、さあ、と思ったとたん、気がつくと、アレッ何やったかナ…と忘れてるという案配なのだ。

▼いつもなら、それで、発行見送り…となるのだが、八〇年最終号として、今号はムリヤリに一(ちょっとひまを見付けたら、10行でも20行でも、ともかく思い出す)というつくり方で、やってみる。(11日)

雑記あれこれ

10・25反原子力の日 ノート

A. デモの前の集会のこと

10・26(反原子力の日)というと、78年は、女グループの大活躍。79年は、月間行動・一般市民向けにと大いに工夫したミニビラ10万枚の配布と、デモの関電本社前での盛り上り、といったことが、すぐ思いうかぶ。(それらと、ぼくは個人的にも大いにかかわったこともあって、イオム旧号222~224と231・ウリニュースレター94などにかいておいた。)

ところで今年80年は一というと、何よりもまず、10・25デモの出発にひらいた集会を、あげるのに、きっとみんな同意するはずだ。(11月4日10・25反原子力の日行動の総括をやったが、みんな異口同音に、集会がおもしろく楽しかったこと、そのあとのデモへの気分を高揚し解放するものだったことを、あげた。実行委という寄合いの行動でこんなに評価が一致したのもめずらしい。労組関係の工君は、うちの組合でこんなやり方をすると"大衆迎合主義"という批判がでるやろと思う、という感想をつけ加えたが勿論、批判してのことではなかった。

デモの前の集会というと、大てい、つまらない、ときまってる。というより集会に参加してるのではなく、その時間、参加者は拘束されてる。それ程でなくても(例えば三里塚などへいっても、参加者にとっては)前の方で何かやってる一ということでしかない。

そのような集会が、10・25では全く「転倒」して、むしろデモより集会の方が(大きく)評価された、ということだけでも、ぼくらはもっとおどろいてよい。

そして、いま改めてそのことに「おどろく」という、そこから、今年たまたま半ば偶然につくられた「デモの前の集会」のとらえ直しとやり方つくり方の方向(すじ)、意味が、考えられねばならない。そして(来年もこの経験から、きっと「また昨年のように…」という声がでるだろうが)みんなで「大阪での今後のデモと集会の新しい質」を、その一回一回つくる努力が、追求されねばならない。

「半ば偶然に」といったが、集会がどんな成行きで出来たか、簡単に記録しておく。

① ことしの10月反原子力行動は、四年目ともなるとちょっとマンネリズムで、それに実質的中心となる(原関連)の世話役もくたびれていた。② 実行委(一回や二回の司会は原関連事務局によってすゝめられたが、ことしの月間行動は(各グループ独自のものは大いにやってもらいたいが)とくに計画せず、たまたま九月からはじめた原関連市民講座(第二回10月2日(関西新空港反対グループ担当)第三回10月17日(ネルー連担当)などで代用。昨年やった反原発フェスティバルのようなものも、特に日を設けてやるのはムリということで、結局デモ一本にしぼられた。そこで実行委事務局が選ばれて全く未経験で若い新人数人に、その進行がゆだねられた。(それはよかった)

③ 事務局は一応実行委に名は列ねたが、ことしの10・26は原発連設予定地日高の現地デモを定めたので、昨年のような労組のデモ動員は一切できないーということだった。(それで)日高への参加するグループのことも考慮し、実行委は、10月25日(土)午后、関電本社を目標としたデモを決定した。④ デモの前の集会で行われるスローガンやアピールなど、プログラムの話合いのなかで、昨年の反原発フェスティバルに代るものとして、実行委の主催ということで、参加できるグループだけの有志で、午后一時すぎから、歌やコントや一分間アピールなど、参加者をもまきこんだ前座の行事をつくり、三時すぎから、いわゆる集会にはいり四時丁度デモ出発、五時・関電前というあらましの段取りがきまった。(デモをもりあげようとするなら、まずその前の集会をもり上げるべく全力をそそぐ必要がある。集会がもり上れば、デモはひとりでに高揚する、とぼくはそのとき強調した) そして各グループができるだけ工夫して、いろんな形式のアピールを、次の実行委にもってきて、それでプログラムをつくることになった。時間の割ふりで一グループ約10分以内という割当てで。⑤ 一グループ10分の割当て、は予想外に、各グループの積極性をつくり出した。初めに考えられたプログラムづくりでは三時を前後に、硬軟わかれる筈が(ちがって)そのワクがとりはずされ、硬軟が入りまじって構成されることになった。(これは、実際に当日やられて、異和感をかもすどころか相乗的な効果をよんだ) ⑥ 実行委事務局発行のニュースでそれらは、第一部(反原発祭まつり)第二部(市民の大デモ)と名付けられ、第一部、集会のイメージは、参加者そして10分間の割当て時間を受もつたグループに意識的な変化をうみだした。そしてはじめ、そのような方向になじめなかったグループにも、同調し競演するような雰囲気を生みだした。

⑦ あいにく25日は雨だった。(その日朝10時ぼくは関電本社へみんなとおしかけ、回答の如何によって

その玄関前を占拠して〝関電の電気料金十億円水まし徴収サギを糾く市民法廷〟を開くときめていた。それが雨でやれるかどうか、やきもきした。）

デモの集合場所（南天満公園）での、一時半からの集会は、今なさし、水にまりをさけ、腰を下すとてもない立ちっぱなしという悪条件で、しかもプログラムはつくったものの、行きあたりばったり各グループから何がとび出すか、出たとこ勝負の進行だった。ところが（事前にどんなに充分企画したとしても）これ以上をのぞめないほど、みんなが楽しみ、わらい、叫び、四時からのデモへの高揚と一体感をつくりだす集会となった。（それをくわしくはかけないが、たとえば非暴力直接行動（10/2）の五頁に掲載した〝人民新聞！〟の報い記事〟一味違った反原発祝祭〟も、それを伝えていることでも明らかなように、ぼくの一　的思いこみではない。）

B．'81関電連の活動への期待

（ことしの実行委と、去年までの実行委との明白なちがいは、名前をつらね、募金を拠出するだけといった団体（それだけでも勿論大きな助力にちがいないが）が二・三のみとなり、反原発を冠した新しい団体が多数できて構成されたということだろう。くわしく云うと、二〇団体と個人一人で実行委がつくられたが、たとえば個人一人という所は、たまたま実行委当日に出席して、どのグループにも属さないということのまま、参加し、しかも一人で一グループと同様の役割（断乗つくりなど）を受持つというふうだった。また、実行委の事務局務は、グループ団体の送出というより、実行委出席者のなかで、やれるものが自発的に引受けるということで（ふつうの運動では、つい事大主義的人選となるところが）、新顔の若い人たちに殆ど任ねるということになった。そしてその結果は、新しく頼母しい活動家を生んだ。

10・25が終り、実行委は解消的に（原関連）へと移行することになったが、その事務局送任には、それらのことが反映して、新しい若い人たちが選ばれた（身軽るに気安く動く事務局によって、81年の原関連活動に期待たい。その自由自在さを保証し、助けるものとして、決してブレーキにならぬよう、ぼくもがんばりたい）

八一年反原関連に、新しい活動家が出てきたということ――それは、この10・25がつくり出した大きな成果と云わねばならない。

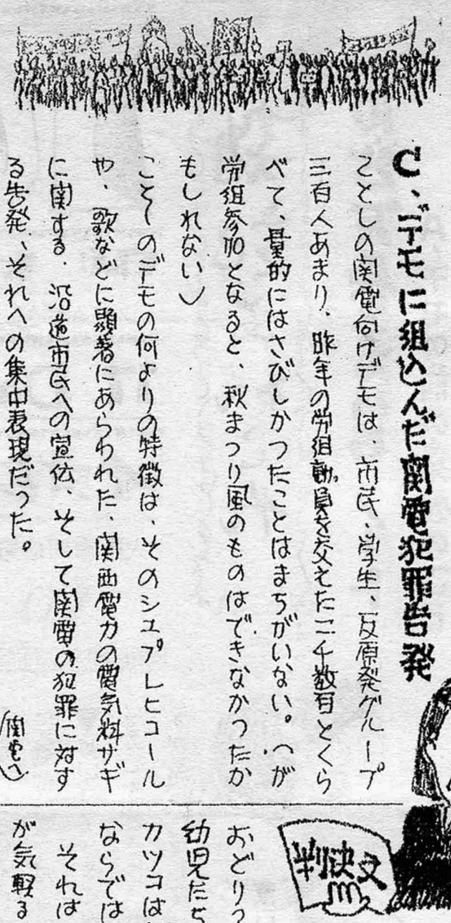
督促状はたとえば「今なお回答がないが、それは10億円サギという詐欺事実をもつ後ろ暗さがあってのものと解するが、それで差支えないか（習慣）」「私らは無責（貴）貴社をサギドロボー呼ばわりすることを好むものではない。無回答は、サギと呼ばれてもどうしようもないことを貴社を認めるものと了解する。それでよいか・これは為替通告である。（8日）」　しかし更に念をおすため翌日朝、予告の上で「電気代という市民にとって日常不可欠の問題である以上、関電は回答を拒むことはできない」という趣旨で、直接訪問して面談した。そして最終的に「それらに対し答える義務も責任もない」という回答を引き出し攻撃の的をしぼるというデモの前哨戦をつくってきたのである。

C．デモに組込んだ関電犯罪告発

ことしの関電向けデモは、市民・学生、反原発グループ三百人あまり、昨年の労組動員を交えた二千数百とくらべて、量的にはさびしかったことはまちがいない。（が労組参加となると、秋まつり風のものはできなかったかもしれない）

こと〜のデモの何よりの特徴は、そのシュプレヒコールや、歌などに顕著にあらわれた、関西電力の電気料サギに関する、沿道市民への宣伝、そして関電の犯罪（問題）に対する告発、それへの集中表現だった。

そのために実行へそれを委任された不払い連）委は、10月11日付で申入れをし、回答期日をすぎた21日以降は、連日四回にわたって回答の督促状を送り、そのコピーをマスコミ等16ヶ所へこれまた連日送付する、という方法をとった。（それは事務的には必死ともいうべき大へんだった。それをやりぬいたのはその事務こそが、戦に外ならなかったからだ。（その詳細報告までかえると当初からで七回、のべ約二百通、印刷枚数にして二千五百枚を発送したことになる。）新聞社など、否応なしに、この事務局としての戦いにびっくりしただろう。）



〈補遺〉「集会で、満場を抱腹絶倒！させたのは何といっても〈関西新空港反対グループ〉の、大熱演！〝雀の学校〟のチイチイパッパをうたいながらのジグザクデモまがいのダンス。〝花を風も踏み越えて〟をうたって、ダンボール細工の原発や新空港を、踏みつぶしておどり？など。その深刻にして重厚、不器用にして真剣？幼児たちでもやらないドキマギのヘアをやらかして、日頃のエエカッコはどこへやら、なりふりとられたしぐさは、まことに、男たちならではつくり出せぬーうまいへたなどを超えたみものだった。

それは、ちょっとした視点と発想によって、男たちもまた（女たちが気軽まく身軽するように）男もそのままのやり方で、方向転換ができる可能性を、ぼくにたちさせるものだった。

▼〝抽象あれこれ〟と題したのに、10.25のことばかしになった。〝女の学校〟の女たちのことから学ばねばならないこと、〝非暴力直接行動はあれかこれか、と選ぶものではないこと〟、〝何を判断の目安、ばかり〟にするか〟など、が浮んできて、それらをかく、つそりだったのだが――　16日

D．デモの一体感

たとえば、昨年までのデモは、実行委員会そのものだった。隊列として、たゞ前後してつゞいている以上を出ない、労組・学生・市民グループ・別々の集団というのが内実で、それを、どうしよう、という積極的うごきは、市民グループにわずかにあるとは云え、手のつけようもないものだった。ことしは、学生と市民グループだけだったということもあるが（いつも結果的に）そのシュプレヒコールや演説などが、他方とかかわりなく行われるため、しばしば妨害しあうようなことがデモの中で起っていた（ことは相互が改善しあい、ときには一しょに唱和するなどが試みられる）などの、協調がはつきりと生れてきた。

とくに関電本社まえでの高揚。そして同じ一つの叫びを何どとなくくりかえして、一せいに叫びつゞけたとき、一体感は、何よりもことしのデモを特徴づけるものだった。（関電前に立止ってうごかないデモを歩き出させるために、機動隊がやってきたとき、学生たちがすばらしいハーモニーでうたい出した。〝私たちは動かない〟に、思わずぼくも唱和しながら、身内をかけのぼってくる何とも云えぬ一体感に、ぼくはすこし酔っていた）